

第 21 回大学図書館と国立情報学研究所との連携・協力推進会議

議事要旨

1. 日時：2021 年 2 月 22 日（月）15:00～16:55
2. 場所：オンライン
3. 出席者：

（委員館）

喜連川所長，漆谷副所長，合田学術基盤推進部長，木下学術基盤推進部次長（以上，国立情報学研究所），熊野館長，江川事務部長（以上，東京大学附属図書館），
【代理】船山学術情報部情報企画課係長（以上，筑波大学附属図書館），石川学術情報センター長，河西学術情報課長（以上，横浜市立大学学術情報センター），山崎所長，富澤学術情報課長（以上，大阪市立大学学術情報総合センター），ローリー館長，本木事務部長（以上，早稲田大学図書館），須田所長，松本事務長（以上，慶應義塾大学メディアセンター本部）

（陪席）

細川総務課長・大学図書館コンソーシアム連合運営委員会委員長（東北大学附属図書館），小山教授・これからの学術情報システム構築検討委員会委員長（中央大学），飯野専門員・これからの学術情報システム構築検討委員会委員（佛教大学図書館），安原主任・オープンアクセスリポジトリ推進協会運営委員会事務局（国立情報学研究所図書館連携・協力室），三宅学術基盤整備室長，土井参事官補佐，麻沼学術基盤整備室大学図書館係長，安達学術基盤整備室大学図書館係員，若狭学術基盤整備室オープンサイエンス振興係係員（以上，文部科学省研究振興局参事官（情報担当）付），森総務課長，久保田情報管理課長（以上，東京大学附属図書館），石井学術情報担当係長（横浜市立大学学術情報センター），伊賀学術情報課長代理（大阪市立大学学術情報総合センター），笹渕総務課長（早稲田大学図書館），関口課長，加藤（以上，慶應義塾大学メディアセンター本部），溝口総務部長，佐藤学術基盤課長，小野学術コンテンツ課長，平田図書館連携・協力室長，片岡学術コンテンツ課副課長，古橋学術コンテンツ課支援チーム係長，服部学術コンテンツ課支援チーム係長，阪口学術コンテンツ課学術コンテンツ整備チーム係長，村上学術コンテンツ課学術コンテンツ整備チーム係長，新妻学術コンテンツ課研究データ基盤整備チーム係長，林学術コンテンツ課研究データ基盤整備チーム係長（以上，国立情報学研究所）

4. トピックレクチャー

議事に先立ち，佛教大学の飯野専門員より，これからの学術情報共有プラットフォーム

に係る講演があり、以下の意見交換があった。

- 出版社との「共生」というキーワードが出てきた。共生は可能だと考えているか。
 - ODI という機能はアメリカではうまく機能している。それと同じことが日本でも実現可能だと考えている。
 - 政府ではプラットフォーム規制について議論されている。この議論は、そもそも共生できていないから起きているのではないか。
 - 本講演で話題にするウェブスケール・ディスカバリ・サービスとは、図書館向けに提供されているサービスを指しており、Google 等ではない。このサービス自体が図書館と強い共生関係にあるもの。
 - Google の検索エンジンに組み込まれてしまう可能性があるのではないか。
 - 出版社によって、Google Scholar にデータ提供する場合もあれば、Deep Web に情報共有をするのをためらっている場合もある。
 - 例えば YouTube コンテンツの著作権対応は Google のアルゴリズムによって自動処理されている。こういった巨大プラットフォームに近いうちに飲み込まれていくのではないか。
 - ハゲタカ雑誌やハゲタカ図書といった存在もあり、Web 上に出回っている情報をただ集めればよいということではなく、どういった書誌データを利用者に提供すべきか、従来、選書と言われる図書館員が果たしてきた取捨選択機能が必要になっている。この延長線上で、ウェブスケール・ディスカバリが残っていく可能性があるのではないかと思う。
 - Web サービスは動きが速い。投資対効果として、利益が出る頃には古くなっていた、ということがないように、考慮する必要がある。
- 電子コンテンツの場合はチャプター単位での購入が進んでいるのか。
 - 必要な部分のみの購入や必要な部分に対する数日間のアクセス権の購入、といった契約も新たに発生しており、ライセンス情報としてちゃんと把握できていなければいけない、という事情がある。
 - 例えば Apple が権利処理を一括して実施した、iTunes の図書館版のようなものはないのか。
 - Reprints Desk といったような、個人向けに、権利処理された論文 1 点ずつを販売するサービスもある。
 - Amazon や Google は対 C[ustomer]だけのサービスで、対 C の方が対 B[usiness]よりも圧倒的にメリットが大きい。そういった面から、学生を対 C だと想定した場合の図書館のモデルについて検討する必要もあるかもしれない。
 - 海外では学生が所属機関以外の図書館と直接やり取りをする、といった事例もある。日本でもそういった考え方があってよいし、必要になってくる。

- コロナ禍においては、図書館は積極的な活動が難しかった。日本がデジタルコンテンツを作ってこなかったことも影響している。この状況がこの先しばらくは継続することを前提に、図書館だけでなく、学術情報流通全体での将来図を描いていただきたい。
- 文系と理系では電子情報に対する依存度が異なる。理系はほぼ 99%電子に依存する現状だが、図書館職員は文系が多く、ICT 技術やデータ解析は苦手な印象である。時代のニーズに即応した人材育成をどのように進めるのか。
 - データサイエンティストの育成は重要課題であり、司書育成のカリキュラムも変えていく必要がある。すでに勤務している職員については、コミュニティ内で技術や知識の共有を進めて養成していく必要がある。
 - 人材育成には非常に時間がかかる。使えるツールを大学間で横展開するしか方法はないのではないかと考えている。

5. 議事：

(報告事項)

(1) 前回議事要旨について

国立情報学研究所（以下 NII）・喜連川委員長より、前回議事要旨は既に確定済みである旨の確認があった。

(2) 大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）の活動について

NII・平田室長より、資料 2 に基づいて報告があり、以下のような意見交換があった。

- 理系の場合には電子ジャーナルの予算が研究を左右するという切実な背景がある。図書館予算が増加しない状況では、ジャーナル費が上がるとどれを切るのか、という選択にならざるを得ない。来年以降も引き続き JUSTICE の価格交渉に期待したい。
- JUSTICE の会員館調査によって、ジャーナル問題検討委員会で話題に出たような、細かい粒度のデータを集められるようになっているのか。
 - 少しずつ調査の方法は変えているが、例年と同等レベルのデータを集めている。委員会ではせっきくのデータなので会員館にもっとフィードバックするように、ということだった。そのようにしていきたい。
- 最終的な契約が各館に任されている、という現状では、しっかりと各館の情報を集める必要がある。APC 等、図書館だけでは集められない情報収集も重要である。
 - 文部科学省・JUSTICE・図書館が一丸になって取り組む必要がある。

(3) これからの学術情報システム構築検討委員会の活動について

中央大学・小山教授より、資料 3 に基づいて報告があり、以下のような意見交換があった。

- インフラを立派にしても使用できる人間がいないと意味がない。日本の学術情報流通の世界が欧米を凌駕するには、人材育成をどうすべきか考えていただきたい。
 - 人材育成もミッションとして掲げている。決して多くない図書館員のリソースの効率的な再配分についても検討していきたい。

(4) オープンアクセスリポジトリ推進協会 (JPCOAR) の活動について (報告)

東京大学・江川事務部長より、資料4に基づいて報告があった。

(5) 国立情報学研究所の学術コンテンツ事業について (報告)

NII・小野課長より、資料5に基づいて報告があった。

(6) 国立情報学研究所 教育研修事業について (報告)

NII・小野課長より、資料6に基づいて報告があった。

(7) 国公立大学図書館協力委員会の最近の動向について (報告)

慶應義塾大学・須田メディアセンター所長より、資料7に基づいて報告があった。

(8) 『大学共同利用機関法人情報・システム研究機構国立情報学研究所と国公立大学図書館協力委員会との間における連携・協力の推進に関する協定書』の更新について (審議)

NII・木下次長より、資料8に基づいて提案があり、慶應義塾大学・須田メディアセンター所長からも国公立大学図書館協力委員会としても更新を要望するとのコメントがあり、審議の結果、更新することが確定した。

(9) 会議資料等の国立情報学研究所機関リポジトリ (仮称) への登録について (報告)

NII・小野課長より、資料9に基づいて報告があり、承認された。

(10) その他

以下の情報提供があった。

- NIIの千葉分館について、東京大学の柏キャンパス内に移動し、東京大学の情報基盤センターと合築した。3月10日に合同の開所式を行う予定であり、オンラインセミナーも実施されるので、お時間があればご参加いただきたい。
- 今年度はオンライン形式でのセミナーが多数開催されたが、この形式は以降も標準になると思う。NIIでは、ネットワークを用いたバーチャルイベントを気軽に開催できる「サイバー大講堂」環境を全国の教育研究機関に提供している。適宜ご活用いただきたい。

以 上